

子どもの歌のピアノ弾き歌い指導における オンラインレッスンの試み

— コロナ禍の授業実践における成果と課題 —

An Attempt of Online Lessons
for Singing Nursery Songs with Simultaneous Piano Self-Accompaniment
: Results and Issues in a Practice during the COVID-19 Crisis

葛 西 健 治
KASAI, Kenji

Abstract

This paper is a study of online lessons for singing nursery songs with simultaneous piano self-accompaniment. The ICT tool used was Zoom. The online lessons were real-time, interactive, and one-to-one. The following three issues had to be solved in advance: I. All students must own a keyboard instrument. II. Being able to produce sound at home. III. Proper installation of the device. The first part of the project was resolved with the support of the college, but II and III were a burden to the students. Students particularly struggled to adjust the angle of the device's camera - to show the hand playing the piano and the mouth singing.

Students were satisfied with the privacy and attention to detail in one-on-one instruction, but they regretted that the online lessons did not allow them to learn from their classmates as well. The most significant outcome of the online lessons is the guarantee of continuity of practical learning. However, when considering the quality of education, the instability of the communication environment and the time lag are issues that cannot be overlooked. The technological challenges are just waiting for the progress, but I intend to explore new possibilities in terms of mutual learning among students in online lessons in the future.

キーワード：保育者養成、音楽教育、遠隔授業、Zoom、Google Classroom

0. はじめに

2020年度が始まって間もなく、新型コロナウイルスの感染拡大及びそれに伴う「緊急事態宣言」(4月7日)の発出を受け、こども教育宝仙大学(以下、本学)では春学期の授業を遠隔で開始することが決定した。当初は4月20日から5月10日までを遠隔授業期間と定めていたが、結果的には8月末まで、春学期のほぼ全ての科目について遠隔授業を継続することとなった。

筆者の担当する「音楽と表現Ⅰ」(1年次春学期開講。以下、音表Ⅰ)は、集団での演習形態で声と鍵盤楽器(ピアノ)による表現の基礎を学んだ後、個別指導にシフトして子どもの歌のピアノ弾き歌いの基礎を学ぶ科目であ

り、当然ながら実技的な内容がその中心を占める。2020年度は、学期前半は教材配信等による「オンデマンド型」の遠隔授業を行い、学期後半はウェブ会議システム Zoom (ズーム)¹を活用したオンラインレッスンに移行した。

保育者(教員)養成の音楽科目における ICT 活用、あるいは e ラーニングによるピアノ(弾き歌い)の指導法に関する先行研究は、その多くが反転授業(小栗ほか 2018、酒井ほか 2018)やブレンデ(イ)ッドラーニング(永嶺 2017、中平ほか 2010)の理念に基づいた「オンデマンド型」の授業実践に関するものである。

深見、中平らによる一連の研究では、受講者・指導者間での演奏動画のやり取りによる遠隔・非対面指導(深見ほか 2009)、模範演奏動画や注釈付き楽譜を用いた e ラーニングピアノ弾き歌い教材による実技力向上の試み

こども教育宝仙大学 准教授

(深見ほか 2010、中平ほか 2010)、更にピアノ弾き歌い教育の質保証を見据えた新たな教育デザインの提示(中平ほか 2012)等、保育者養成におけるピアノ弾き歌い指導を核とした様々な授業研究が細やかに行われているが、これらは対面授業(レッスン)の補完を主な目的としたオンデマンド型教材(学習)に関する研究であり、今回コロナ禍において筆者が試みたオンラインレッスンとの親和性は低い²。

Music Laboratory (ML) による集団指導をベースとし、その課題として浮かび上がった個別指導の必要性や、受講者・指導者間の双方向コミュニケーションの担保等の視点に立った小倉(2011、2014、2015)の研究も、やはり対面授業を前提としたICTツールの活用に関する内容が中心である。一方、小倉には「リアルタイム・ピアノレッスン」の可能性を探った研究もある(小倉2005)。ただしこの研究は弾き歌いではなくピアノ(器楽レッスン)を中心になされたものであり、論中のICTツールも今日とは隔世の感がある。それでも研究の観点としては、本稿にとって参照の価値がある。

本稿では、ウェブ会議システム(Zoom)を用いた「リアルタイム」、「同時双方向」、「マンツーマン」によるピアノ弾き歌い指導を「オンラインレッスン」と定義し、オンデマンド型教材(学習)とは異なる観点から、その授業実践に関する研究を行う。

始めに2020年度音表Iにおいてオンラインレッスンが実現するまでの道程を辿り、授業実践の前提を明らかにする。その上で、子どもの歌のピアノ弾き歌い指導におけるオンラインレッスンの成果と課題を検証し、保育者養成における音楽教育の新たな教授法の一つとしての可能性を探る。

なお本研究は、こども教育宝仙大学学術研究倫理委員会による審査を経、承認を得たものである(申請番号: 20-0016)。

1. 対象科目

1. 1. 概要

2020年度音表Iの受講者数は115名であった。受講者は延べ12の「クラス」に割り振られるが³、その編成は学籍番号(50音順)に基づいて機械的に行われており、この時点ではピアノ演奏の習熟度については全く考慮されていない。

今回筆者がオンラインレッスン(個別指導)を直接担当したのはA班: 9名、B班: 9名、C班: 10名の3つのクラス、計28名であった。

1. 2. 授業全体の概観

音表Iはコロナ禍を受けて全15回を遠隔授業とし、対面授業は1度も行わなかった。授業運営に用いた主なICTツールはGoogle Classroom⁴(以下、GCR)とZoomの2点である⁵。音表I全体の授業内容(概要)を表1に示す。

表1 2020年度音表I: 全体の授業内容(概要)

回	日付	授業内容(概要)
1	5月15日	オリエンテーション
2~5	5月22日~6月12日	音楽と身体・声の表現①②③④
6~9	6月19日~7月10日	鍵盤楽器の表現①②③④
10~13	7月17日~8月7日	子どもの歌①②③④
14	8月20日	期末試験
15	8月28日	まとめと振り返り

第1~9回は、班単位によるオンデマンド型の演習(資料動画等の視聴による自学自習、コメント課題等の提出)を中心に授業を行った。授業の前後には、質疑応答や振り返りの機会としてZoomミーティングの時間を15分程度設けたが、慣れの問題もあってか、Zoomミーティングの最中に口頭で発言をする受講者はほとんどいなかった。Zoomの操作への慣れ、また接続環境が整ってきた時期を見計らって、第4回(音楽と身体・声の表現③: 6月5日)以降はZoomによるリアルタイムでの演習も数回試みた。

第8・9回(鍵盤楽器の表現③④)の授業では、第10回以降のオンラインレッスンへの接続を企図して、試験的にZoomによる個別指導を行ったが、内容は極めて初歩的なピアノ演奏(独奏)の指導、及びカメラの設置位置やアングル調整の助言等に止めた。

2. ピアノ弾き歌い指導におけるオンラインレッスンの実践

2. 1. オンラインレッスンの実施期間と授業内容

Zoomによるピアノ弾き歌いのオンラインレッスン(個別指導)を実施したのは、第10~14回(子どもの歌①~④、期末試験)の計5回である。その日程と授業内容(概要)を表2に示す。

表2 2020年度音表I(第10~14回): 授業内容(概要)

回	日程	課題曲	授業内容(概要)
10	7月17日	むすんでひらいて おおきなくりのきしたで	資料動画の視聴→自習 楽譜(画像資料)の確認→自習 (*オンデマンド型学習) オンラインレッスン(個別指導)
11	7月24日	チューリップ どんぐりころころ	
12	7月31日	とんぼのめがね ぞうさん	
13	8月7日	おかえりのうた おべんとう	
14	8月20日	(なし)	

第10～13回については、オンデマンド型学習とオンラインレッスン（個別指導）を並行して授業を行った。

各回に設定した課題曲2曲の「旋律譜（指づかいを書き込んだ右手・1段譜）」（図1）と「簡易伴奏譜（教員の編曲による両手・2段譜）」（図2）、及び「資料動画」（図3）を、それぞれの授業開始時刻に合わせて配信した。受講者はオンラインレッスン受講時以外の授業時間

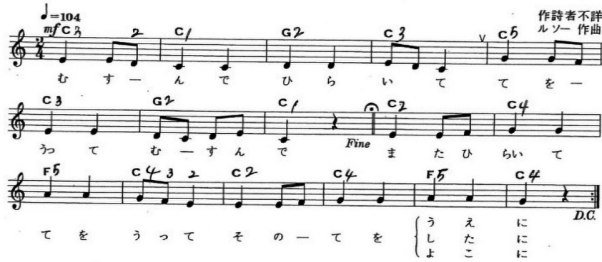


図1 《むすんでひらいて》旋律譜



図2 《むすんでひらいて》簡易伴奏譜（抜粋）

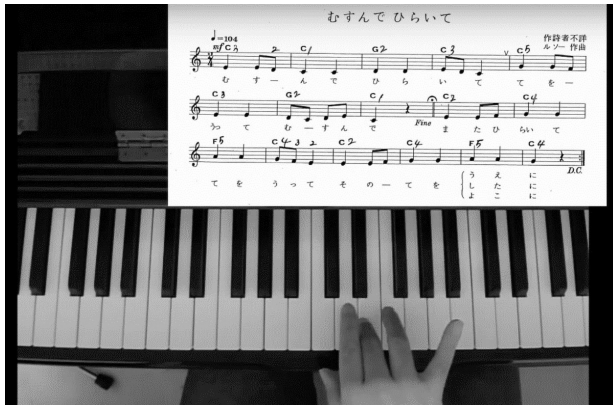


図3 《むすんでひらいて》資料動画の一場面

を使ってこれらの資料を視聴、閲覧（必要に応じてダウンロード、印刷）し、自学自習に取り組んだ。

第14回は「期末試験」であるが、試験方法を「演奏動画の撮影と提出」としたため、実際には演奏動画作成のための「最後の（仕上げの）オンラインレッスン」という形で個別指導を行った。

2. 2. 各回の授業の進め方（受講の手順）

各回の授業の進め方（受講の手順）を表3に示す。

指導者は「レッスン時間割とZoom招待」を作成し、GCRのストリームを利用して自身の担当クラスの受講者に配信する。

図4は、筆者が担当したA班：9名の受講者に配信したストリームの内容である。以下、この例に沿って、時系列で授業の進行を概説する。

受講者はストリームの配信内容を確認し、授業開始時刻までにZoomに入室する。

始めの10分間は「クラスミーティング①」とし、指導者と受講者全員が顔を合わせた状態で、参加者確認やオンラインレッスンの打ち合わせ、質疑応答、またその回の課題曲への取り組み（オンデマンド型学習：自身の楽譜に指づかいを書き写す、暗譜を目指して最低でも「歌」

第10回 (7/17)
 A班葛西クラス・レッスン時間割

10:30～ クラスミーティング①（全員参加）
 10:40～ 受講者A
 10:45～ 受講者B
 10:50～ 受講者C
 10:55～ 受講者D
 11:00～ 受講者E
 11:05～ 受講者F
 11:10～ 受講者G
 11:15～ 受講者H
 11:20～ 受講者I
 11:25～ フリータイム（質疑応答、また希望に応じて2回目の個人レッスンを受け付けます）
 11:50～ クラスミーティング②（全員参加）

<https://zoom.us/>.....
 ミーティングID:
 パスワード:

各自の入室時間等、詳細についてはクラスミーティング①の中で説明します。

図4 事前準備：ストリームの配信内容（レッスン時間割とZoom招待）の一例

表3 2020年度音表I（第10～14回）：授業の進め方（受講の手順）

	指導者（教員）	受講者（学生）
事前準備	レッスン時間割とZoom招待の配信 「課題曲」資料動画等の作成・配信	レッスン時間割とZoom招待の確認
授業時間内	クラスミーティング①（打ち合わせ）	
	オンラインレッスン （個別指導）実施	オンラインレッスン （個別指導）受講
		「課題曲」資料動画等の確認・視聴 →自習
クラスミーティング②（まとめ）		

だけは練習する、等)についての解説、指示を行う。

クラスミーティング①終了後、受講者は一旦 Zoom を退室し、その後はレッスン時間割に沿ってオンラインレッスン(個別指導)を受講する。受講者は自分のレッスン開始時刻の1~2分前までに再びクラスの Zoom に入室し、待機室⁶にて指導者の入室許可を待つ。指導者はマンツーマンでの指導環境を維持するため、各受講者のレッスン時間が終わる毎に口頭で退室を指示し、その退室を確認した後、次の受講者の入室許可を行う。

最後の受講者のレッスン終了後、「クラスミーティング②」までに残った時間は「フリータイム」とし(図4の例では25分間)、受講者の希望に応じて2回目、あるいは3回目のレッスンを受け付ける。この際の Zoom への入退室の方法は、レッスン時間割に沿った受講の場合と同様である。

授業終了時刻の10分前に、再びクラスの受講者全員が Zoom に入室し「クラスミーティング②」を行う。ここでは指導者の伴奏のもと、その回の課題曲2曲を受講者全員で歌唱(斉唱)する。指導者、受講者共に「ビデオ・オン」の設定は共通であるが、ハウリング等を回避するため「マイク・オン」は指導者のみとし、受講者は全員「マイク・オフ」の状態で指導者の伴奏(あるいは弾き歌い)を聴きながら、それぞれに課題曲を歌唱する。指導者は受講者の口元の動きなどをビデオで確認しながら全体の指導を行う。

最後にその回のまとめを行い、質疑応答、次週の予告を経て授業終了となる。

オンラインレッスンに当てる時間は、受講者1人当たり5分間という非常に短いものであるが、これはクラスの全員が満遍なく、当該授業時間内に確実に1回はオンラインレッスンを受講できるよう熟慮した結果である。その不足を補うものとしてフリータイムを設定した。

なお、インターネットの接続不良や Zoom の不具合等、事前の申し出があった受講者に対しては、「演奏動画の提出」をもって「オンラインレッスン参加」とみなす、という救済措置を講じた。その他、出席認定や評価方法の詳細については割愛する。

2. 3. 実践環境

前述の通り、音表 I においてピアノ弾き歌い指導のオンラインレッスンを開始したのは第10回(7月17日)からであり、その実現に向けた環境の整備は、先立つ遠隔授業の実施と並行しながら約2か月間をかけて丁寧に進めていった。

前提としての通信環境⁷、及び Zoom の操作に関しては、他の科目の授業実践を含めた経験や試行錯誤を経て、指導者、受講者共に7月時点ではすでにほぼ滞りなく対

応できる状態にあった。

ピアノ弾き歌い指導のオンラインレッスンの実現に当たり、環境面で独自に整備・調整が必要となった事柄は以下の3点である。

- ①自宅等(受講場所)における受講者全員の鍵盤楽器所有の実現
- ②授業実施時間帯に音出しができる環境の確保
- ③使用デバイスの適切な設置(カメラ、マイクの位置・アングルの調整)

本項ではこの3点の解決方法、及びその整備・調整のプロセスを、指導者と受講者双方の視点から詳述する。

2. 3. 1. 自宅等(受講場所)における受講者全員の鍵盤楽器所有の実現(①): 大学によるキーボードの無償貸与

オンラインレッスン実施の検討を始めて間もなく、「鍵盤楽器の所有状況に関する調査」(Google Forms による)を行った⁸。調査開始当初はオンラインレッスンの是非の判断を目的としており、結果によっては春学期の音楽科目を全てオンデマンド型の遠隔授業とすることも視野に入れていた。しかしその間に、補助金⁹を活用したキーボードの購入と学生への無償貸与について大学側から提案がなされ、以降はオンラインレッスンの実施を前提として調査を継続した。

購入するキーボードの選定に当たっては、価格、サイズ(受講場所での設置のしやすさ)、鍵盤数(子どもの歌の弾き歌いの学習に必要な十分な音域)、鍵盤の寸法(特に初学者の学びのプロセスに配慮し、実際のピアノと実寸大の鍵盤を備えたもの)等、筆者を中心に様々な観点から検討を重ね、最終的に61鍵盤(5オクターブ)を備



図5 大学が購入したキーボード:
CT-S100(カシオ、61鍵盤)

えたカシオの「CT-S100」を40台、購入した(図5)。音表Iを受講する1年生(115名)の(購入)必要台数は12~22¹⁰と見込んでいたが、実際の貸与数は20¹¹となり、想定範囲内で受講者全員の鍵盤楽器所有を実現することができた。

なお音表Iの指導者(担当教員)は筆者を含めて4名であるが、筆者以外の3名はそれぞれが自宅に所有する鍵盤楽器(グランドピアノ、アップライトピアノ)を用いてオンラインレッスンを行い、筆者のみ大学にて、試行を含め3種の鍵盤楽器を用いてオンラインレッスンを行った(詳細は後述)。

2. 3. 2. 授業実施時間帯に音出しができる環境の確保(②)

ピアノ弾き歌いのオンラインレッスンにおいて、音出し(ピアノを弾く、歌を歌う)ができる環境を確保することは指導者、受講者の双方にとって必要不可欠な条件である。相手から届く音はヘッドホンやイヤホンを用いて外部に漏らさず聴取できたとしても、「弾き歌い」のオンラインレッスンを行う以上、自身が「その場で」音を発する行為はどうしても避けられない。またその際に発する音は日常会話程度の環境音ではなく、音楽性を帯びた「楽音」であり、当然ながら相応の音量をもって周囲に影響を与えかねないものである。

前項の「鍵盤楽器の所有状況に関する調査」には、この「音出し環境の確保」を念頭に置いた質問項目も設けていた。その回答結果は表4の通りである。

表4 Q. 「自宅(もしくは自室)で「弾き歌い」の練習はできますか
(時間帯は金曜日の10:30~16:10を想定して下さい)

1. 鍵盤楽器で音を出しながら練習できる	53
2. 歌(アカペラ)の練習はできる	23
3. ヘッドホンを使って練習できる	19
4. その他(「マンションの為微妙」)	1

「1年生対象:鍵盤楽器の所有状況に関する調査」より(回答数:96(115名中) 回答率:83.5% 実施期間:2020年4月27日~5月4日)

質問内容が「練習」の可否を問うものになっているのは、前述の通り、この調査を始めた当初はオンデマンド型授業の実施を視野に入れていたためである。そのためこの回答は、一義的には授業実施時間帯における自宅(自室)での音出し「練習」の可否を示すものであるが、これはそのまま「オンラインレッスン受講」時の音出しの可否を示すものと見なして差し支えないものと判断し

た。

回答の内容から、「3.」「4.」を選択した20名(20.8%)の受講者が、授業実施時間帯の「音出し」に何らかの支障がある(と感じている)ことが判明した。

特に賃貸のアパートやマンションでは、いわゆる「楽器演奏」が制限されている場合がある¹²。またコロナ禍にあり、授業実施時間帯に家族等が在宅ワーク(テレワーク)を行い、「音出し」がその支障となり得ることも想定された。

これらの調査結果と想定をもとに筆者が行ったことは、音出しの際の「音量」への懸念を払拭、あるいは軽減するための声掛けである。

特に効果的だったのは、主に電子ピアノやキーボードの使用者に対して行った、「**普段テレビを視聴する時と同じ位の音量に、鍵盤楽器の音量を下げ(調整して)オンラインレッスンを受講してほしい**」という声掛けであった。受講者が「テレビ視聴と同じ位の音量」で演奏しても、指導者側が十分にその音を聴き取って指導が行えることは、この声掛けのプロセスにおいて経験的に確認できた。

また前述の通り、受講者1人当たりのオンラインレッスン実施時間は5分間であり、「**実際に「音出し」をして受講する時間は極めて限定的である(5分間以外はヘッドホン等を用いて自主練習を行えば良い)**」ということも徹底して周知した。

これらの声掛けや助言を丁寧に行った結果、第10回(子どもの歌①:7月17日)にはほぼ全ての受講者の「音出し」環境が整った¹³。

2. 3. 3. 使用デバイスの適切な設置(カメラ、マイクの位置・アングルの調整)(③)

ハード面に係る環境設定において筆者が留意した点は、指導者と受講者の双方がお互いに「**音(会話、歌声、ピアノの演奏音)がよく聴き取れること**」、「**顔が見ながらコミュニケーションが取れること**」、また「**ピアノを演奏する手元が確認できること**」の3点である。

特に3点目は、初学者(読譜が苦手な受講者)とのオンラインレッスンにおいて非常に重要なポイントとなる。指導者は受講者の手元を見ることで、演奏の際の手の形や位置、また指づかいに関する助言を行うことができる。翻って受講者は、指導者の指の動き(鍵盤の位置や音価、リズム等)を視覚的に捉えて真似をすることで、読譜力の低さをカバーしながら効率よく学習を進めることが可能となる。

これら3つの条件を満たすためには、指導者、受講者の双方において使用デバイスの適切な設置が必要となる。双方の主な使用デバイスはノートパソコン、タブレッ

ト、スマートフォンの3種類であったが、受講者側の設置位置、特にカメラやマイクの位置、アングルについては、予め第9回(鍵盤楽器の表現④:7月10日)の課題作成(演奏動画の撮影)に係る指導の中で個別に助言、調整を行った¹⁴。

2. 4. 指導環境

筆者が用いた鍵盤楽器は、アップライトピアノ(大学備品)と2種類の電子ピアノ(クラビノーバ:CLR-635(大学備品)、カワイデジタルピアノ:PN2(研究室設置の私物))の3種である。

アップライトピアノ

アップライトピアノによる指導環境を図6、7に示す。

鍵盤に向かって右側に教卓を置き、その上にノートパソコン、外付けマイクを設置した。ネット接続には学内のWi-Fiを利用した。マイク機能はノートパソコンと外

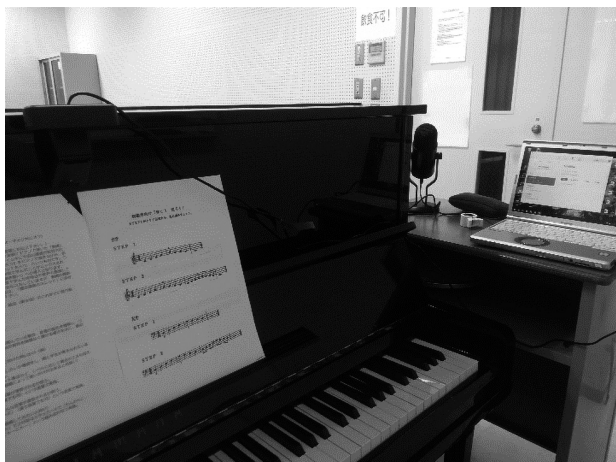


図6 アップライトピアノによる指導環境1
(全景)



図7 アップライトピアノによる指導環境2
(手元撮影用カメラ)

付けカメラにそれぞれ備わっていたが、オンラインレッスンでの音質や集音性を考慮して、別途高性能の外付けマイク(サンワダイレクト 400-MC015PRO)を使用した。

顔を映す際にはノートパソコンのカメラを使用し、ピアノ演奏の手元を映す際には外付けカメラに切り替えた(俯瞰アングル)。カメラの切り替えにはZoomのショートカットキー¹⁵を用いることで、スムーズに指導を展開することができた。

図6(左上)では、楽器の本体上部に外付けカメラを引っ掛けて設置をしているが、アップライトピアノの特性上、演奏の際に生じる物理的な振動がカメラに大きく伝播してしまい、画像にブレが生じることが判明したため、実際のオンラインレッスンでは図7のようにマイクスタンドを利用して、直接楽器に接触しない状態でカメラを設置した。

なお、筆者が使用したアップライトピアノの設置場所は本学1号館地下、ピアノレッスン室1である。オンラインレッスン実施時間帯に同フロアにいたのはほとんど筆者一人であり、周囲にはオンラインレッスンの支障となるような騒音や生活音はなかった。

電子ピアノ(クラビノーバ、カワイデジタルピアノ)

始めに、クラビノーバによる指導環境を図8、9に示す。

筆者が使用したクラビノーバは、前項のアップライトピアノと同じく本学1号館地下、ピアノレッスン室1に設置されたものである。通常の対面授業では学生が使用する楽器である。

アップライトピアノとの大きな違いは、電子ピアノには物理的なピアノ線がなく、上前板が存在しないために、

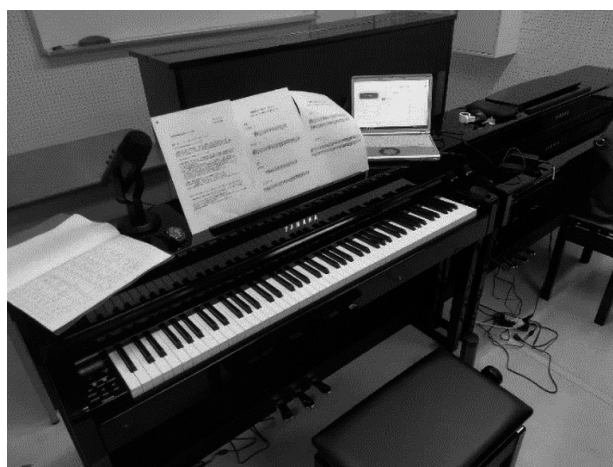


図8 電子ピアノ(クラビノーバ)による指導環境1
(全景)

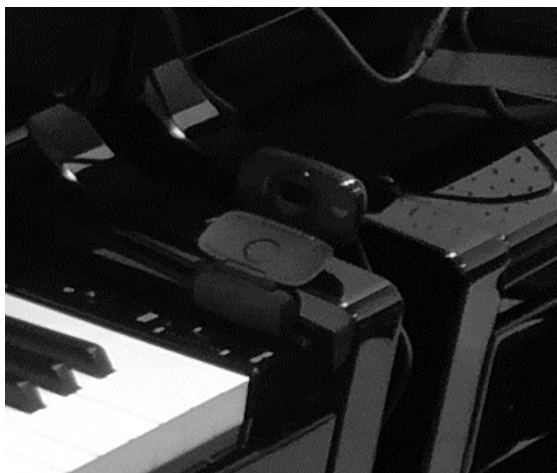


図9 電子ピアノ（クラビノーバ）による指導環境2
（手元撮影用カメラ）

譜面台の両脇と後ろのスペースに様々な機材等が置けるという点である。ノートパソコンと外付けマイクはそのスペースを利用して、楽器本体の上に設置した(図8)。更に、演奏の際に生じる物理的な振動もカメラに影響を与えない程度のものであったため、手元撮影用カメラ(図9)も、鍵盤右横の腕木に直接立て掛けて設置した(横アングル)。

次に、カワイデジタルピアノによる指導環境を図10、11に示す。

クラビノーバの指導環境との違いは、手元撮影用カメラを譜面台上部に設置し、俯瞰アングルとした点である。クラビノーバでは手元撮影用カメラを腕木に立て掛けて横アングルとしたが、アップライトピアノで試みた俯瞰アングルの方が、特に初学者にとって教育的効果の高いことが経験的に感得されたため、3度目の試みであったカワイデジタルピアノでは、この俯瞰アングルを採用した。

ここでは手元撮影用カメラを譜面台の中央に設置したが、楽譜等はカメラの両脇に適宜置くことで、支障なく指導を行うことができた。

カワイデジタルピアノのある研究室では、音出しによる周囲(隣接する他の教員研究室や廊下)への影響が懸念されたが、幸いクレーム等が寄せられることはなく、無事にオンラインレッスンを実施することができた。

なおここで初めて外付けマイクの使用を止め、外付けカメラに備え付けのマイクを使用したが、指導者の話し声や歌声、ピアノの演奏音は、オンラインレッスンに必要な十分な程度、受講者に届くことが確認できた。

2. 5. 受講環境

受講者側の環境について、オンラインレッスンの動画データ¹⁶の中から任意の受講者2名(A: ノートパソコン



図10 電子ピアノ（カワイデジタルピアノ）による指導環境1（全景）



図11 電子ピアノ（カワイデジタルピアノ）による指導環境2（手元撮影用カメラ）

ン使用者、B: スマートフォン使用者)の画像を抜粋、編集したものを図示し、指導者(筆者)の視点から解説する¹⁷。なお本項の図12、13における指導者(筆者)の使用楽器は電子ピアノ(カワイデジタルピアノ)、指導場所は教員研究室である。

受講者A(ノートパソコン使用者)

図12は、ノートパソコンによる受講者Aとのオンラインレッスンの一場面である。

オンラインレッスンの前後には必ず顔を合わせて、課題内容の確認や振り返りを行った。受講者Aはマイク付きイヤホンを適宜用いながらオンラインレッスンを受講していたようである。

図13(左)は、指導者が模範演奏をする手元の様子を、俯瞰アングル(図11)で受講者に示す場面である。デフォルトでは上下が反転した映像が受講者側に送られてしまうが、事前にZoom画面の角度調整を行い¹⁸、受講者が演奏する目線で指導者の模範演奏を視聴できるよう配慮した。

図13(右)は、指導者の模範演奏を見ながら受講者Aが弾き歌いを行う様子である。受講者Aは自身の前方、楽器の上にノートパソコンを設置しており、カメラ

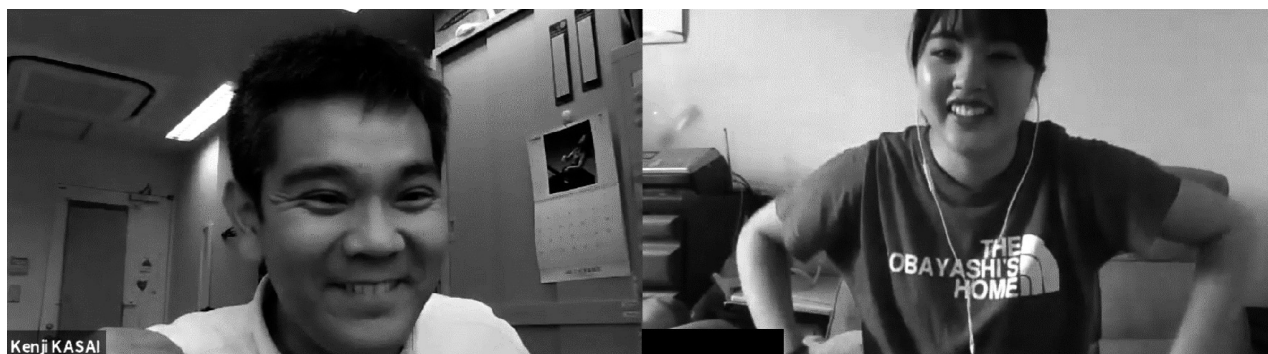


図12 受講者A(右)と指導者(筆者)1

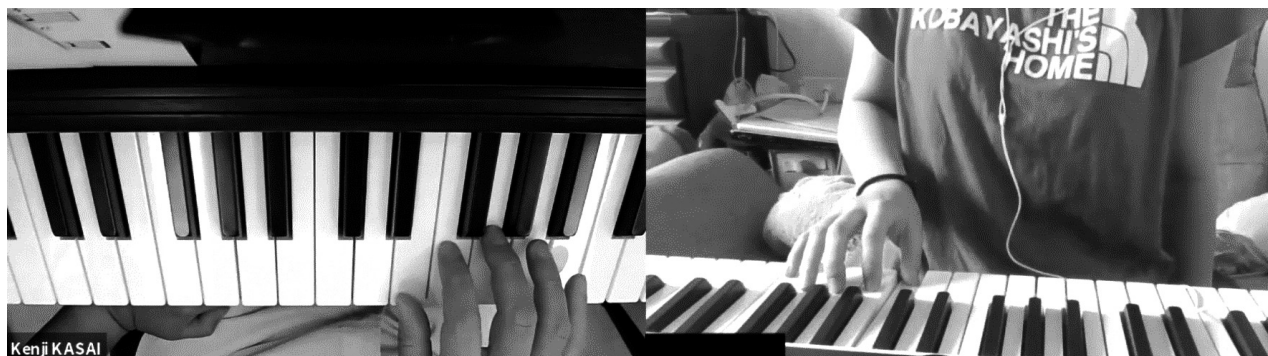


図13 受講者A(右)と指導者(筆者)2

アングルを変更する際には手でモニターの角度を下げて対応していた。受講者はZoom画面の角度調整を行っていないが、筆者はこの映像でも十分に指導が可能であった。

受講者B(スマートフォン使用者)

図14は、スマートフォンによる受講者Bが弾き歌いを行う様子である。

受講者Bは前掲の図9に近い形でスマートフォンを鍵盤右横の腕木に立て掛けて設置しており、画面は横アングルとなっている。顔の表情や口元(歌唱の様子)、



図14 受講者B(スマートフォン使用)

手元(ピアノ演奏の様子)が一画面に全て収まっているため、オンラインレッスンの最中にカメラのアングル変更を行う必要がなく、指導者とのやり取りもスムーズであった。

ただし横アングルは、受講者の手元を視認する上では指導者にとってやや難があったが、打鍵ミスや指づかいの大幅な間違いが頻発しない限り、指導上、さほど大きな支障とはならなかった。

3. アンケート調査

3.1. 概要

音表Iの教育的効果を分析するため、授業最終回(2020年8月28日(金)2・3・4限)において、受講者全員(115名)を対象に記名式によるアンケート調査を行った。

各時限の授業開始時刻にアンケート(Google Formsによる)を配信し、それぞれの授業終了時刻を回答期限とした。アンケートへの回答は任意とし、授業時間内に各自のタイミングで自由に取り組むことを求めた¹⁹⁾。

倫理的配慮として、調査結果は授業改善と研究目的以外には一切使用しないこと、調査結果を研究目的に使用する場合には個人が特定されないよう十分配慮すること、回答内容は一切成績に関わらないことを口頭、及びアンケート冒頭の説明欄で周知した。

有効回答数は89、有効回答率は77.4%であった。
質問項目は以下、8つのセクションに分けて提示した。

(遠隔授業に関する内容)

- ①オンデマンド教材 (第10～13回に配信した「子どもの歌 (弾き歌い)」に関する資料) について
- ②オンラインレッスン (第10～14回: Zoomによる弾き歌いの個別指導) について
- ③オンラインレッスンと対面レッスンの比較

(自己評価)

- ④声の表現 (歌うこと)
- ⑤鍵盤楽器の表現 (ピアノを弾くこと)
- ⑥弾き歌い
- ⑦読譜 (楽譜を読むこと)

(自由記述)

- ⑧授業全体について

本研究の主眼はオンラインレッスンにあるため、上記のうち太字・下線で明示した2つのセクション、②と③を主たる分析対象とする。

また冒頭で定義し、度々言及してきたように、本稿における「オンラインレッスン」は指導者と受講者とのマンツーマンによる取り組みを前提とするため、オンラインレッスンに係る質問項目については、全受講者の回答データを総合的に分析するよりも、指導者毎に(「クラス」単位で)データを整理し、それらの内容を詳細に検討した方がより精度の高い成果検証が可能になるものと考えられる。よって本項では、筆者が指導者として直接オンラインレッスンに携わった「クラス」の受講生(28名)を対象を絞り、その回答データを抽出、匿名化して分析を行うこととする。

なお筆者の担当「クラス」(28名)の有効回答数は21、有効回答率は75.0%であった。

3.2. 結果と考察

予め選択肢を用意した質問項目の回答結果は、円グラフにまとめる。

自由記述による回答を求めた質問項目については、全体の内容をまとめた上で要点を整理し、それらを回答数の多い順に提示する。なお複数の要点が含まれる回答については、その都度カウントする。自由記述の引用に当たっては原文の掲載を原則とするが、明らかに誤記と思われる箇所については筆者の判断で適宜修正したものを掲載する。

3.2.1. オンラインレッスンの受講環境

図15に、使用デバイスについての回答結果を示す。

筆者の担当クラスではノートパソコンによる受講者が11(52%)と最も多く、次いでスマートフォン(8:38%)、タブレット(2:10%)の順であった。

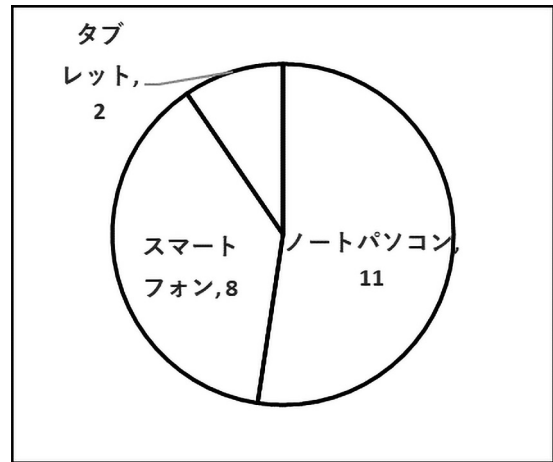


図15 使用デバイス (単位: 人)

図16に、受講場所についての回答結果を示す。

「自分の部屋」(11:52%)と「家族との共有スペース」(10:48%)がほぼ同数であった。「受講場所」はすなわち、「鍵盤楽器の設置場所」を指すものと捉えて差し支えないものと思われる。

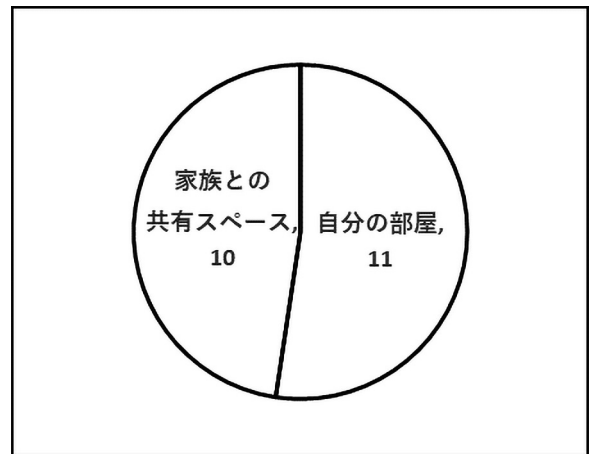


図16 受講場所 (単位: 人)

図17に、オンラインレッスン受講時の「周囲の環境」についての回答結果を示す。

「常にひとりだった」が17(81%)、「近くに家族等、他の人がいた」が4(19%)という結果であった。

後者の回答(近くに家族等、他の人がいた:4)を「受講場所」に関する回答結果(図16)に照らし合わせると、そのうちの3人が「家族との共有スペース」、1人が「自分の部屋」との回答であった。「近く」という語の解釈の違いも影響すると思われるが、「自分の部屋」で受講

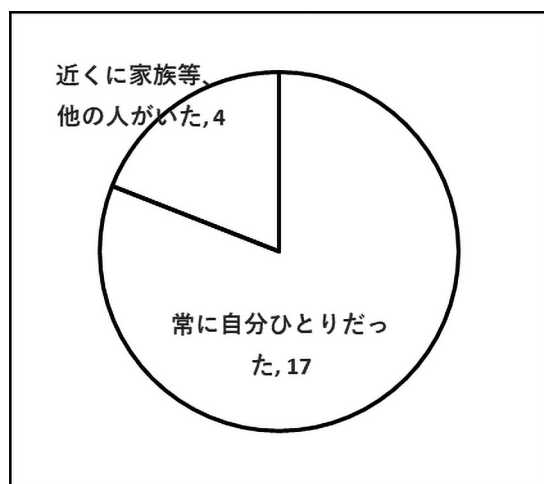


図 17 周囲の環境 (単位:人)

していても「ひとり」とは限らない、少なくとも、「自分の部屋」にいながらも「近く」にいる他人の存在を気にしながらオンラインレッスンを受講した例があったことが示されている。

また別の視点で捉えると、「家族との共有スペース」での受講者10人(図16)のうち、7人は「常にひとりだった」と回答しており、特に「音出し」が必要となるピアノ弾き歌いのオンラインレッスンの受講については、同居する家族等の理解、協力があつたことが窺える。

3. 2. 2. オンラインレッスンを受講する上で「苦勞したこと」(自由記述)

本設問では13名から回答が得られた。記述内容の要点は以下の通りである(カッコ内の数字は回答数)。

- ・使用デバイスの適切な設置 (6)
- ・通信環境 (5)
- ・音出し環境の確保 (3)

要点はいずれも「2. 3. 実践環境」で触れた内容に一致する。

1点目の「使用デバイスの適切な設置」については、「どこの位置にカメラを設置すれば鍵盤と自分どちらも写すことができるのか試行錯誤した」というように、カメラアングルの調整に苦慮した受講者が多かったようである。

2点目の「通信環境」については、既述の通り、オンラインレッスンを開始した7月中旬時点ではほぼ問題がないものと筆者は捉えていたが、受講者は相当の苦勞を感じながら受講を続けていたようである。記述内容を見ると、インターネットの接続状況に関する問題の他、指導者との間に生じるタイムラグや、音声の聞き取りに不便を感じたこと(「先生側でピアノを弾いた後それに音

量が調整されピアノ後の先生の声小さくなり聞き取りにくくなることがあつた)等、オンライン通信によるウェブ会議システム一般についての問題に言及するものもあつた。

3点目の「音出し環境の確保」に関する記述を見ると、「家族のために、音量を配慮しなければならない」、「ピアノが置いてあるのが家族の共有部分だったので家族に今から授業だからと言って家族を入れさせないのが苦勞でした」というように、周囲に気を遣い、また家族等の協力を得ながらオンラインレッスン受講に努めた様子が具に窺えた。

3. 2. 3. オンラインレッスンの満足度とその選択理由(自由記述)

図18に、オンラインレッスンの満足度についての回答結果を示す。

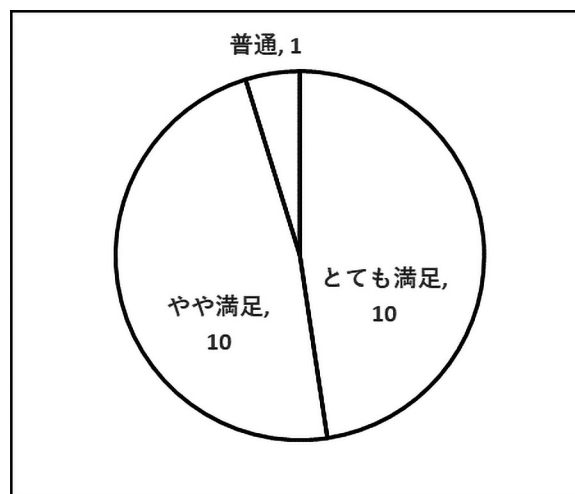


図 18 満足度 (単位:人)

「とても満足」と「やや満足」が10(48%)と同数で、「普通」が1(5%)という結果であつた。その他の選択肢「やや不満」と「とても不満」については回答がなかった。本アンケート調査は記名式で実施したため、指導者(教員)に対する付度があつた可能性は否定できないが、ここでは満足度の選択理由(自由記述)の分析と併せて、オンラインレッスンに対する受講者の評価の一端を示したい。

以下に、自由記述の内容を選択肢別に整理し分析する。

とても満足

「とても満足」の選択者(10人)は、全員が自由記述にも回答した。記述内容の要点は以下の2点に整理される。

- ・指導内容に対する評価 (8)

・個別指導に対する満足感（3）

2つの要点が相互に関わり合っていることは、記述を引用することでよく理解される。

1点目については、「苦手な部分のアドバイスをもらえてできるようになった」、「いい点悪い点を明確に教えてもらいすごく自分のためになった」等の記述があった。2点目については、「オンラインでのレッスンは初心者の私にとって少し不安でしたが個別の指導だったので不安もなくなり安心して受けることができました」、「個人レッスンの時間が確保されていたのはとてもよかった」等の記述が見られた。今回は「マンツーマンによる個別指導」に重点を置いたオンラインレッスンを行ったが、このことによって、一人一人に対する細やかな指導の実現が一定程度達成されたことが確認できた。

一方、「ピアノを聞いてもらうのに与えられる時間は少なかったですが、適切にわかりやすく改善点を教えてくれるため満足できるだけ指導してもらえた」というように、満足感だけでなく、短い指導時間に対する物足りなさにも言及する記述も見られた。

やや満足

「やや満足」の選択者（10人）は、9人が自由記述に回答し、1人が無回答であった。

満足感に係る記述内容は前項に重複するため、ここでは「やや」の選択理由に係ると思われるネガティブな記述内容に焦点を当てて要点を整理する。

- ・通信環境の不安定さ（4）
- ・指導時間の短さ（2）
- ・対面レッスンと比較した物足りなさ（2）

1点目の「通信環境の不安定さ」に関する回答は、「3. 2. 2.（受講する上で苦労したこと）」における「通信環境」と同一線上にある。本項では「ネット環境の問題により上手くレッスンが受けられない事もあった」、「音が聞こえなくなったり、入れないときがあるのでやや満足」等の記述があった。特にZoomによるリアルタイムでのオンラインレッスンでは、まさにその時々通信状況の良し悪しが、受講者の学習意欲に少なからぬ影響を与えたことが窺える。

2点目の「指導時間の短さ」については、様々な条件からやむを得ない設定であったとは言え、受講者の学習意欲を十分に満たせなかったことは遺憾である。

3点目、「対面レッスンと比較した物足りなさ」に係る回答は、「音楽の授業はやっぱり対面がいいです。リモートだと物足りない感じがします」、「やはりピアノは

対面でやりたかったという気持ちがあります」という2つの記述である。オンラインレッスンと対面レッスンの比較については、受講者の意向調査を含めて後述する。

なお、「普通」の選択者（1名）は自由記述について無回答であった。

3. 2. 4. オンラインレッスンと対面レッスンの比較

約1ヶ月間、5回に渡るオンラインレッスンを経験した上での受講者の認識を確認することを目的として、本セクションではオンラインレッスンと対面レッスンのメリットとデメリットについて、受講者自身の考えを自由記述することを求めた。

以下、それぞれの項目毎に回答内容を整理し、考察を加える。

大学入学以前のピアノ学習経験（予備調査）

大学入学以前のピアノ学習経験がレッスンの受講形態の比較にバイアスを与えることを想定し、始めにその点について確認（予備調査）を行った。回答結果は図19の通りである。

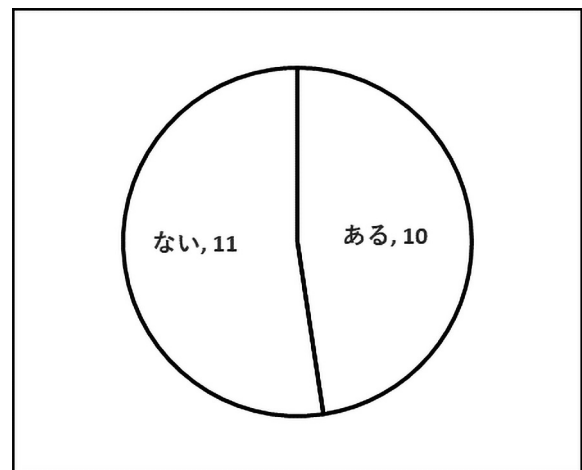


図19 大学入学以前のピアノ学習経験（単位：人）

筆者の担当クラスでは、「ある」（10）と「ない」（11）の回答がほぼ同数という結果であった。

因みに「ある」と回答した10人について、その「およその年数」を質問したところ、「9～10年」が3人、「2～3年」が2人、「半年～1年」が3人、「半年未満」が2人という結果であった。更にこの10人については、大学入学以前のピアノの「オンラインレッスン」の受講経験についても質問したが、全員が「ない」という回答であった。

オンラインレッスンのメリット

本設問では21人全員から回答が得られた。記述内容の

要点は以下の通りである。

- ・プライバシーの保障 (8)
- ・リラックス、集中できる環境 (6)
- ・通学 (時間) の節約 (5)
- ・練習時間の確保 (4)
- ・感染リスクの回避 (3)

「プライバシーの保障」に係る記述を見ると、「他の人に自分の歌ってる姿、弾いてる姿を見られない」、「他の人に聞こえないし、見えないので緊張が緩和する」等、他者、特にクラスメイトの視線に対する不安感が垣間見える。

「リラックス、集中できる環境」という要点は、「プライバシーの保障」と重なる部分があるが、記述内容としては、「自分の家で落ち着いて集中できる」、「家で受けられるのでリラックスして受けることができる」のように、受講環境としての自宅のメリットを前面に出すものが多く見られた。

「通学 (時間) の節約」に関しては「外に行かなくても良い」、「簡単に移動せずにレッスンが受けられる」等、やや短絡的な記述が見られたものの、「練習時間の確保」に関しては「自分の納得がいくまで練習できる」、「自分の家でやるので直後にやりたいところの練習がすぐに行える」等、学習意欲の高さを窺わせる記述も見られた。通学 (時間) を節約することで、より多くの練習時間が確保できる、と考えれば、この2点の意図するところは本質的には重なり合っていると解釈することができるだろう。

「感染リスクの回避」は、対面レッスンのデメリットの項で後述する「感染リスクの高さ」と表裏一体である。本項では「密な場所での授業では無いので安心して受けることができる」というように、「感染リスクの回避」をオンラインレッスンのメリットとして認識する受講者がいたことが確認された。

オンラインレッスンのデメリット

本設問では21人全員から回答が得られた。記述内容の要点は以下の通りである。

- ・通信環境 (状況) による影響 (9)
- ・孤独感 (6)
- ・音出し環境の確保 (3)
- ・質問のしづらさ (3)

本項の回答は、1点目の「通信環境 (状況) による影響」や3点目の「音出し環境の確保」等、質問内容の相

似性から、既述の「3. 2. 2. (オンラインレッスンを受講する上で「苦労したこと」)」の内容と重複したものが多かった。その中でも本項では、「こちらのピアノの音がきちんと聞こえているのか不安になるときがある」、「通信環境が良くないと、自分自身は参加可能であっても授業に出られない」というように、オンラインレッスンの同時双方向性に対する受講者側の不安感を示す記述が散見された。

2点目の「孤独感」は、クラスメイトとの関係性において生じたものである。記述内容を見ると、「友達に会えないので1人で授業を受けて練習してとなるので心細い感じがしました」、「周りの状況が見れないので、少し寂しく感じました」、「ちょっと難しいところを友達に気軽に教えて貰えない」等、クラスメイトとの学び合いに対する欲求が示されていた。これは前項(オンラインレッスンのメリット)での「プライバシーの保障 (クラスメイトの視線に対する不安感)」と相反するが、ここにはまさに、オンラインレッスンに対する受講者の葛藤が表れていると言えよう。

4点目の「質問のしづらさ」は、主にオンラインレッスン (個別指導) の受講時間の短さに起因するものと考えられる。

対面レッスンのメリット

本設問では20人から回答が得られた。記述内容の要点は以下の通りである。

- ・細やかな指導 (12)
- ・クラスメイトとの学び合い (6)
- ・質問のしやすさ (5)

最も多かったのは、「細やかな指導」が受けられる、という点であった。回答のいくつかを引用すると、「指の動きなど細かい部分も見えて指導してもらえる」、「わからないところをすぐに聞ける」等、実技の学びにとって不可欠とも言える、指導の直接性や即時性に言及したものが多くみられた。

3点目の「質問のしやすさ」は、前項(オンラインレッスンのデメリット)の「質問のしづらさ」と表裏一体であるが、これもまた対面レッスンにおける指導の直接性や即時性というメリットに結び付く事柄である。

2点目の「クラスメイトとの学び合い」は、前項(オンラインレッスンのデメリット)の「孤独感」と関連しつつ、対面レッスンに対する受講者の期待感の表れであると解釈できる。「他の人の演奏を聞ける」、「友達と相談できる」、「友達同士で教えあうことができる」という声には、マンツーマン指導に対する受講姿勢とは角度を

異にした、主体的な学びを志向する受講者の意識が窺える。

対面レッスンのデメリット

本設問では20人から回答が得られた。記述内容の要点は以下の通りである。

- ・感染リスクの高さ（6）
- ・クラスメイトとの比較(他者の視線に対する不安)（6）
- ・通学（時間）の手間（3）

オンラインレッスンのメリットとして「感染リスクの回避」を挙げた回答数は3にとどまったが、ここでは対面レッスンのデメリットとして「感染リスクの高さ」を指摘する回答数が6に上った。「歌う」ということをしているので（中略）少し不安、「歌うこともあり感染リスクが高い」等、「歌」による飛沫感染のリスクに言及する回答があった他、「1回の授業ごとにピアノを軽く消毒したり教室全体の消毒など大変なことが多くなる」、「コロナのように感染症が流行していると対策に追われることができるのが少なくなる」等、感染対策の労力や、その作業による学習時間の減少にまで思いを巡らせた回答も見られた。

「クラスメイト」の存在については、本項ではやはり対面レッスンの心理的なデメリットとして多く言及された。「自分が遅れているとわかる」、「ピアノが上手い友達の演奏を見て自信がなくなる」、「周りが出来るのが自分の目で見えてしまうので、焦ってしまう」というように、クラスメイトを自身の比較対象として意識してしま

うことへの不安感を吐露する内容が多く見られた。

3. 2. 5. 秋学期以降に希望する「子どもの歌のピアノ弾き歌い指導」の受講形態

表5に、秋学期以降に希望する「子どもの歌のピアノ弾き歌い指導」の受講形態に関する回答結果を示す。なお、「オンラインレッスン」への志向性が高い回答は「太線」、「対面レッスン」への志向性が高い回答は「破線」で明示した。

全体を概観すると「オンラインレッスン」（太線）が8（38%）、「対面レッスン」（破線）が8（38%）で同数となり、それ以外(オンラインレッスン5割・対面レッスン5割/どちらでもよい)を合わせた数は5（24%）という、比較的バランスの取れた回答結果であったと言える。

項目別の順位1位は「オンラインレッスン7割・対面レッスン3割」（7：33%）であるが、これはコロナ感染症のリスク回避を優先しつつ、対面レッスンの受講希望とのバランスを熟慮した結果であったと考えられる。それに次ぐ順位2位が「全て対面レッスンがよい」（5：24%）であることにも留意したい。諸々の事情に鑑みたと、やはり子どもの歌のピアノ弾き歌いの実技指導に関しては全て対面レッスンで受講したい、と考える受講者が少なからず存在するという結果は、真摯に受け止めるべきではない。

表5の縦二重線の右側に示したものは、全体の回答結果を「入学前のピアノ学習経験」に照らし合わせたものである。

注目されるのは、ピアノ学習経験「あり」と答えた受講者の方が、「なし」の受講者に比べて対面レッスンへ

表5 秋学期以降に希望する「子どもの歌のピアノ弾き歌い指導」の受講形態

選択肢	回答数	割合	入学前のピアノ学習経験			
			あり		なし	
全てオンラインレッスンが良い	1	5%	1	10%	0	0%
オンラインレッスン7割、 対面レッスン3割の割合で受講したい	7	33%	3	30%	4	36%
オンラインレッスン5割、 対面レッスン5割の割合で受講したい	3	14%	0	0%	3	27%
オンラインレッスン3割、 対面レッスン7割の割合で受講したい	3	14%	2	20%	1	9%
全て対面レッスンが良い	5	24%	4	40%	1	9%
どちらでも良い	2	10%	0	0%	2	18%
(合計)	21		10		11	

の志向性が高いという点である。「あり」の方は「オンラインレッスン」(太線)が4(40%)、「対面レッスン」(破線)が6(60%)であるのに対し、「なし」の方は「オンラインレッスン」(太線)が4(36%)、「対面レッスン」(破線)が2(18%)であった。更に中間的な2つの選択肢(「オンラインレッスン5割・対面レッスン5割」及び「どちらでも良い」)の回答結果に着目すると、「あり」は0(0%)、「なし」は5(45%)であり、「あり」は「なし」に比べて、受講形態に対する意思をより明確に表明したことがわかる。

「全てオンラインレッスンが良い」という回答が、唯一「あり」側にあるものの、全体として「あり」の受講者は、入学以前に受けた対面レッスンの経験から、そのメリットをより実感していたと考えることができる。

4. まとめ

本稿における「オンラインレッスン」は、コロナ禍という未曾有の社会的危機の中、必要に迫られて実施に踏み切ったものである。この急務に対応できた背景には、Zoom等のウェブ会議システムの急速な発達、またGCRを始めとした教育に係るICTツールの普及がある。また当然ながら、受講者ら、若い学生たちのメディアリテラシーの高さがその前提にあったことも念頭に置かねばならない。

小倉(2005)の実験結果²⁰と、本稿の実践研究の成果を比較したものを表6に示す。

「4.」、「5.」について、小倉は「遅い動きであれば可能」という条件を付けているが、本稿ではその問題はほとんど解消していたと言える。また「6.」、「7.」について、小倉は他のアプリケーションとの併用の可能性について言及しつつ「試用しなかった」としている。この2点については本稿でも実際には試みていないものの、Zoomの画面共有機能やホワイトボード機能を用いれば、応用は十分に可能である。

このように、外面的にはオンラインレッスンの可能性は広がりを見せたと言えるが、やはり現在でも課題とし

て残るのが、「3.」に係る「タイムラグ」の問題である。これはピアノ弾き歌い指導の質に関わる、致命的な課題である。

受講者へのアンケート調査では、マンツーマン指導の利点を中心に満足感が示された一方、デバイスの設置に苦労したこと、またクラスメイトの存在に対する葛藤が示唆された。

5. おわりに

オンラインレッスンを始めた当初、筆者は「対面授業(レッスン)を代替するもの」としてのオンラインレッスンの実現、その可能性の追求に拘っていた。音楽に関する実技的な指導は対面で行うのが当たり前、むしろオンラインによるバーチャルなアプローチはその教育的価値を損ね、意義を歪め兼ねないものとまで考えていた節がある。

ところが、試行錯誤を重ねながら実践を進める中で、(ディスプレイ越しではあっても)目の前にいる受講者が確かに成長し、子どもの歌の弾き歌いのレパートリーを一つずつ獲得していく姿に、実技的な学びの継続性の保障、というオンラインレッスンの教育的意義に気付かされた。これは対面授業との比較によるデメリットに目を向けたままでは得られなかった気付きであり、ポスト・コロナを見据えた新たな音楽教育の展開 — 例えば、実習期間中の学生が在宅で受講できるような補習的指導 — の可能性をも示唆するものである。

本稿におけるアンケート調査の分析では、項目を限定した上で筆者の担当クラスのみをその対象としたが、これを全受講者に拡大し、更に多くの観点からクロス分析を行えば、より細やかにオンラインレッスンの成果と課題が検証できたものと思われる。また課題曲の習得状況(合格した曲数)等、オンラインレッスンの具体的な成果に関する量的な指標を示せなかったことは、今後の課題としたい。

アンケート調査の分析を通して示唆された、受講者にとっての「クラスメイト」の存在の重要性は、今後の授

表6 小倉(2005)の実験結果と本稿の実践研究の成果との比較

	小倉(2005)	本稿
1. 受講者の演奏を聞いてコメントする	○	○
2. 曲全体または部分の模範演奏を受講者に提供する	○	○
3. 両者がタイミングを合わせて一緒に弾く	×	×
4. 受講者の運指や手の動きを見て、誤りを直す	△	○
5. 指導者の運指や手の動きを受講者に見せる	△	○
6. 双方のディスプレイに共通の楽譜を表示する	実験せず	(○)
7. その楽譜にコメントを記入し、双方で視認する	実験せず	(○)

業改善におけるキーポイントの一つとなろう。オンラインレッスンにはまだまだ技術的な課題や制限も多いが、今後は「仲間との学び合い」に対する受講者の意欲を上手く引き出せるような、新たな実践方法や授業デザインを検討していきたい。

引用・参考文献

- 小倉隆一郎 (2005)、「音楽レッスンにおける e ラーニングの活用」、『秋草学園短期大学紀要』22、145-155。
- 小倉隆一郎・田中功一 (2011)、「モバイルラーニングを利用したピアノ学習」、『文教大学教育学部紀要』45、123-130。
- 小倉隆一郎 (2014)、「子どもの歌の弾き歌い学習におけるネットレッスンの活用」、『文教大学教育学部紀要』48、137-144。
- 小倉隆一郎 (2015)、「子どもの歌の学習支援にオンラインストレージと SNS を利用する試み」、『文教大学教育学部紀要』49、223-230。
- 小栗貴弘ほか (2018)、「保育者養成課程における ICT を用いたピアノ教育の効果：一介入群と統制群の比較実験を通じた検証—」、『作新学院大学・作新学院大学女子短期大学部 教職実践センター研究紀要』6、57-97。
- 葛西健治・嶋田陽子・齋藤亜都沙・志田尾恭子 (2020)、「2019年度春学期「音楽と表現 I」報告：表現へのアプローチを主体とした初年次音楽教育の試み」、『こども教育宝仙大学紀要』11、91-103。
- 酒井勇也・仙北瑞帆 (2018)、「ICT を活用したピアノ弾き歌いの授業実践：一教員養成課程における自作映像教材を用いた反転授業の試み」、『音楽教育実践ジャーナル』16 (0)、48-57。
- 中平勝子・赤羽美希・深見友紀子 (2010)、「ブレンデッドラーニングを取り入れたピアノ弾き歌い指導の改善」、『日本教育工学会論文誌』34 (Suppl.)、45-48。
- 中平勝子・赤羽美希・深見友紀子 (2012)、「ピアノ弾き歌い教育の質保証」、『日本教育工学会論文誌』36 (3)、291-299。
- 長嶺章子 (2017)、「ピアノ弾き歌い学習支援における ICT 利活用の効果と課題」、『植草学園短期大学研究紀要』19 (1)、11-20。
- 深見友紀子・中平勝子・赤羽美希 (2009)、「ピアノ弾き歌いにおける遠隔・非対面指導の効果と課題」、『京都女子大学発達教育学部紀要』5、31-40。
- 深見友紀子・中平勝子・赤羽美希・稗方攝子 (2010)、「ピアノ弾き歌い学習における e ラーニング教材の効果」、『京都女子大学発達教育学部紀要』6、35-46。
- 深見友紀子・中平勝子・赤羽美希 (2012)、「携帯端末を使用した演奏映像提出の現状と今後の課題」、『京都女子大学発達教育学部紀要』8、97-105。

注

- 1) Weblio 辞書 (デジタル大辞泉) には、「クラウドコンピューティングを利用したウェブ会議システム。また、同システムを開発した米国ズームビデオコミュニケーションズ社の通称。専用のアプリをインストールしたパソコン・スマートホン・タブレット型端末を使用し、URL やパスワードを共有する利用者同士でウェブ会議などを行うことができる」とある。(https://www.weblio.jp/content/Zoom 2020年11月7日閲覧)
- 2) ただし一部ではあるが、特定の楽曲について一度も対面でのレッスンを行わず、e ラーニング教材のみを用いてその学習効果を分析したものもある (深見ほか 2010: 43)。
- 3) クラスの編成に係る詳細については、葛西ほか (2020: 92) 参照。
- 4) Google 社が教育機関向けに開発し、無料で提供する ICT 学習ツールのこと。このサービスを利用すると、教師はクラスの作成、課題の出題と採点、フィードバックの提供などを1か所で行うことができる。(https://edu.google.com/intl/ja_ALL/products/classroom/ 2020年11月8日閲覧)
- 5) これは本学教務委員会が定めた遠隔授業実施に関する方針 (「遠隔授業について (2020年4月14日)」)、「遠隔授業の実施方法とルール (2020年4月23日)」) に則ったものである。
- 6) 「待機室」の設定 (有効化) は、Zoom (ミーティング) における「セキュリティ」の項目から行うことができる。「待機室」の機能を有効にすることで、ホスト (指導者) はミーティングへの参加者 (受講者) の入退室をコントロールできるようになる (version 5.4.2 (58740.1105)/2020年11月10日動作確認済)。
- 7) 本学では5月21日より、希望者を対象にモバイル Wi-Fi ルーターの無償貸与を実施し、遠隔授業に係る通信環境の整備を支援した (「学生生活支援センターからのお知らせ」http://hosen.ac.jp/news/20200521-01.html 2020年11月10日閲覧)。
- 8) 授業内容として最も早い時期 (5月下旬) にピアノ弾き歌い指導を始める必要のあった2年生 (「音楽実技Ⅱ」4月8日～) を皮切りに、1年生 (「音楽と表現Ⅰ」4月27日～)、3年生 (「音楽表現指導法演習」4月28日～) の順に調査を進めた。
- 9) 「大学等における遠隔授業の環境構築の加速による学修機会の確保」(https://www.nii.ac.jp/news/upload/20200501-2_Mext.pdf 2020年11月8日ダウンロード、閲覧)
- 10) 5月7日集計時点での1年生の調査結果は、回答数が105 (未回答10)、そのうち鍵盤楽器未所有者が30、また未所有者の中で「5月末 (※オンラインレッスン開始予定時期) までに鍵盤楽器の購入を検討している者」が18で

あった。鍵盤楽器未所有者数(30)から購入検討者数(18)を引いた数(30-18=12)を最少(購入)必要台数とし、その数に未回答者数(10)を加えた数(12+10=22)を最多(購入)必要台数とした。

- 11) 20という数は、第1便を発送した5月下旬のものである。その後も様々な事情から数件の追加申込があったが、春学期中は2、3年生を含めて全学的に不足なく対応することができた。
- 12) 国土交通省が推奨する「賃貸住宅標準契約書」(<https://www.mlit.go.jp/common/001230069.docx> 2020年10月24日ダウンロード)には、「(禁止又は制限される行為) 第8条3乙は、本物件の使用に当たり、別表第1に掲げる行為を行ってはならない」/別表第1 三大音量でテレビ、ステレオ等の操作、ピアノ等の演奏を行なうこと」とある(太字・下線は筆者)。なおこの「賃貸住宅標準契約書」は法令によって使用が義務付けられているものではなく、「楽器演奏」を可とする物件では、不動産会社が独自に作成した契約書の中に特約事項を設け、その内容を盛り込んでいることが多い。これらの内容の確認に当たっては、「楽器可賃貸の定義とは? 楽器可賃貸専門の仲介会社メジャーハウジング(株)の場合【1】」(<https://www.kanaderoom.jp/mag/gakkikateigi/> 2020年10月24日閲覧)を参照した。
- 13) 筆者の担当した受講者28名については、長期欠席者1名を除き、全ての受講者の「音出し」環境が第10回(7月17日)時点で整っていた。その後、他の教員が担当するクラスにおいても、「音出し」環境を理由にオンラインレッスンが滞っているという報告はなかった。
- 14) 個別指導に加えて、第9回(7/10)の課題提出スレッド(GCR)の中に資料動画「動画撮影のポイント」(作成: 嶋田陽子非常勤講師、時間: 1分14秒)を添付した。資料動画では、タブレットやスマートフォンの設置位置について、教員が実例(鍵盤の横のスペースに立て掛ける、別途台を設置して角度調整をする等)を示しながら助言を行っている。
- 15) Zoomではミーティングの最中に「Alt+N」を押すことで、カメラの切り替えを即座に行うことができる(version5.4.0 (58636.1026)/2020年10月28日動作確認済)。
- 16) Zoomのレコーディング機能を用いてオンラインレッスンの様子を動画データ化し、保存したものである。図12~14の元データ(動画)の録画日は2020年7月24日である。なおオンラインレッスンの録画については、当該遠隔授業に出席した受講者全員に口頭で確認を取り、その都度全員の了承を得た上で行っている。
- 17) 本項の図12~14(受講者の画像)については、事前に使用予定の画像を受講者A、Bに示した上で、いずれも受講者本人より、文面にて使用許諾を得ている。
- 18) Zoomの「ビデオ設定」では、使用するカメラを個別に

選択した上で、それぞれの画像のミラーリングや角度調整(90度ずつの回転)を行うことができる(version 5.4.0 (58636.1026)/2020年10月29日動作確認済)。図14(左)は、外付けカメラのデフォルトの角度から、180度画面を回転させたものである。

- 19) 最終回(第15回)の授業全体は、始めと終わりに班単位でのZoomミーティングをそれぞれ15分間ずつ行い、その間の60分間をオンデマンド型授業(資料動画の視聴による子どもの歌2曲の自学自習、及びレポート課題の作成)とした。アンケートへの回答(任意)は、このオンデマンド型授業の時間内(60分間)に各自のタイミングで自由に行うよう指示した。
- 20) 小倉が用いたICTツールは「BitArena1.0」と「MSNメッセンジャー7.0」という、2つのインターネット(TV)電話(フリーソフト)である(小倉2005: 151-153)。